

消息

菊地もね

名前を持つ日には

折り紙のように清潔な化粧を

加減がわからないから二回手を洗って

指紋が流れた指ですくうコンタクトレンズ

鏡をのぞいて虹彩にかざせば

顔の傷跡や歪みが立ちあがってくる

自転車ブレーキに思い知らされた不注意

回復を待つこともできない短気のしるしで

ここに息づいた私を感じる

過去と習慣が読めてしまう皮膚には

ぺかぺかの匂いがする塗りものとか

やけに特徴づけられた現在で折りあいをつけていく

つやも新しさもわずらわしいけど

いまだけを生きる顔のことも気に入っているから

夕方にはしぼみくずれるこの表情で

いつも名前をかまえている

走っていく批評ならどうでもよかった

かたちがあればつねに形容詞をあてがわれ

関係の近い遠いを噂される

私はどこへ連れて行かれるのか

いっそのこと

ひとつがいくつかの名前に化ける

かき氷のシロップにまぎれてしまえばいい

顔も呼ばれ方もその場かぎりの地点

結んだりほごいたり

カーテンの布地に焦点が合うまで待っていい朝
壁とベッドのすきまに落ちている携帯と

すべての視力を寝かせたまま外へ

試しにポケットを裏がえしてみる

今日は何も持っていないようだった

呼ばれないし期待されない

何にも近くない日にはちょうどよかった

一人ひとりの歩みが散らばる大通り

パンプスの留め具がはずれて

足を持ち上げるたびに顔を出すかかどが

靴もアスファルトも踏みつけてあざやかに痛む

広がっている髪をぐさぐさとまとめれば

うまく見放されていく気がした

でもいまと距離を置くのだとして

私はどこへ帰っていくのか

のびていく影を頼りに

自分なりの呼吸をつかもうとする

ふだん投げかけられている矢印たちが

すっかり消え失せる瞬間を目がけて